

「周りのために自分ができること」②

「一段落目」「誰かのために何かをする」ということについて思うこと

(例)

「人間は、誰かの役に立っているという実感を持てなければ、決して幸せにはなれないよ。」最近読んだ漫画にあったセリフだ。「ほしいものは何ですか」と尋ねられると、格好つけて「金がほしい」と言ってみたりする人だって、実際には、恥ずかしいぐらい、誰かの役に立ちたいと思っていたりする。僕も、人前ではとても言えないが、やっぱり誰かの役に立ちたいと思ってしまう普通の人間だ。

「二段落目」一段落目に提示したことについての説明。

(例)

誰かの役に立っているという実感は、もちろんその誰かさんに感謝されたり評価されたりしたときに、最も強く実感できるものだと思う。でも、右のセリフを言った登場人物はこんなことも言っている。「相手に評価されるかどうかなんて、結構どうでもいいことだ。自己満足でいい。大切にしている人の役に立っているという自己満足を食べていけば、それだけで人間は結構生きていけるもんだ。」その通りだとは思わないけど、大人になったら、役に立っているという思い込みでもなければ、どんな仕事もやってられなくなるような気はする。

「三段落目」具体的な例や体験を挙げながら、意見を展開する

(例)

例えば犬の世話。犬は感謝なんかしてくれない。でも、自分が散歩に連れて行ってやらなきゃ、自分が体を洗ってあげなきゃ、こいつは病気になるてしまう。そう思うから、世話ができる。例えば僕の父。家族の中で父はしょっちゅうのけ者になる。中年太りだし、口が臭いし、僕たち家族によく馬鹿にされる。それにすぐ怒る。だから僕たちにうざいと思われる。一人だけセンスがずれている。だからみんなに無視される。でも、父は毎日働きに行き、僕たち家族を食わせている。何の感謝もされず、家族のためにお金を入れて当然だと思われ、もし失業などしようものならきつと僕らに軽蔑される。時々、家族なんか捨ててもっと評価してくれる人と暮らしたら、父はどんなに幸せだろうと思うことがある。だけど、父は僕らを捨てないだろう。父がいなくなれば、僕らが困ることを知っているからだ。自分の存在が役に立っている、自分がいなくなればきつと困る、そう思える相手が周りにいることは、自分がいることに意義を感じさせてくれると思う。

「四段落目」結論・まとめ

(例)

僕は周りのために何ができるだろう。犬の世話、家の手伝い、クラスの係活動。今のところたいしたことは何もできていない。でも、家族や友だちの役に立ちたい。そういう本音はある。父のような稼ぎも、これといった能力もない僕が、周りのためにできることは、今のところ、僕のために何かをしてくれている人たちに、感謝していることを感じてもらうことかもしれない。とりあえず、父に感謝するところから始めてみよう。